



押し寄せ、渦を巻いた。威力はもとより、被害を防げなかった教訓をかみしめる場として、校舎は大きな意味を持つ。市は6月にも住民や遺族を含めた協議の場を立ち上げ、環境整備の検討に着手する。

保存整備に進む中、当時3年の長女未捺さんが犠牲となった只野英昭さん(45)は語り部をしながら、訴訟の原告にも名を連ねる。「50分間の判断や行政の責任逃れの姿勢も伝えていなくては、同じことが繰り返される」と指摘。「手を合わせてくれる人たちに、同じ思いをしてほしくないだけです」

対岸の地区には津波を伝える石碑があったが、大川地区の防災意識は希薄だったとも言う。「結果的に『見たくない』『忘れない』という思いがあったかもしれない。つらくても語り継ぐことが、命を守ることになる」と確信する。

震災から5年2カ月余り。大川地区は更地が広がり、残された校舎は遺族にとって、子どもとの思い出を確認する場所にもなっている。「三女が今年、真衣と同じ6年になった。電話口の声もそっくりなんです」。鈴木さんは時間の経過を実感する。失われた命に報いるため、痛みを受け止め、校舎と向き合う。

大川小の被災校舎 北上川河口から約5キロ上流の低地部に立地。校舎からは河川堤防で川は見えないが、避難可能な裏山は校庭に隣接していた。ハザードマップでは津波浸水の想定区域外で住民の多くも犠牲になった。校舎は全体が保存され、周辺は慰霊・追悼の場として環境整備が行われる。現時点の環境整備費用は約5700万円、年間の維持管理費は約500万円を見込む。石巻市内の震災遺構は、中心部の門脇小校舎も一部保存の方針が示された。津波と火災の被害を受け、校内の避難者が高台に逃れた経験を有する。

【写真＝震災遺構として保存される大川小の被災校舎。避難行動が取られなかったあの日の選択を問い掛ける＝宮城県石巻市】



岩手のニュース